

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-03

東鞆紀行

間宮, 林蔵

(出版者 / Publisher)

南満州鉄道株式会社総裁室庶務課

(発行年 / Year)

1938

附記

渾沌江

渾沌江は混同江の同音異字支那に於ては松花江との合流點より上流を黒龍江と言ひ、下流を混同江と言ふを例とする
 アモル及びア

此江名もと本邦に聞く處は、マンコー河と稱せり。是サ
 ンタン夷の唱る處なり。諸夷山且をさしてジャンタと呼
 び、山且夷自稱してマンゴと云。此河則其居地を経て
 海に入るを以て、マンゴ河と稱するなるべし。魯齊亞
 其他西洋人の如きは、皆是をサカリイン、アモル、アミ
 ュル杯稱せり。サカリインは魯齊亞域中の地名、この河

アモルは
 アモルの音譯

源其處に發するを以て此稱を設るもの成べし。滿州夷も

亦此河源を指てサカリインヲウラと稱すアウラは江の體詞 アモル

アミユル總て聞處なし。渾沌江は林藏問答の序河名を問

しとき、滿州夷書して答る處也。林藏又此河黒龍の稱あ

らん事を問ひしに、黒龍江は別流にして、德楞哩名より

奥地里程不分 黒龍の地方を経て此河に合流する也と答へしと

云。滿州の方言其聲音の清濁去入詳に聞理し難しといへ

共、ガウトーラウラと稱するが如し。此河源魯齊亞境界

中より發して數百里を經、松花江と合流し松花江方名ワンガリヲウラと稱す、朝鮮

の北界より流れ來て此河に入る一大河なり、其他大小の以上滿州 德楞哩名に至り夷の説

合流其源はロシアに發し、朝鮮に發する物其數を不知

原本書入れ
 龍沙紀略曰、
 盛京通志云、
 黒龍江即薩哈
 連江、薩哈連
 者黒也、金史
 曰、混同江一
 名黒龍江、水
 微黒、考混同
 源出長白山、

舊名粟末江、
遼改爲混同江
土人呼松阿里
江、金志諫宋
瓦、又傳諫松
花、其流自南
而北、黑龍江
自北而南、其
與黑龍會、歷
二千五百里之
遙、則兩江不
得混稱、明矣
松阿里江、北
與諸尼江合流
折而東北、受
黑龍江、又南

受島嶼里江、
瀕注於海、因
其納三江之大
故名混同、則
其上游未會於
諸尼、仍當松
花江也、云々
按ニ「サカリ
イン」ハ魯齊
亞域中ノ地名
ト云モノ誤レ
リ已ニ盛京通
志ニモ云ル如
ク滿語黒ノ義
也蓋此江濁水
ナルヲ以テ名

是より凡二十里許の間は東北流してカタカーに至り、夫より正北流する事凡二十三四里にしてカルメーに至り、屈曲して東流し、ボツカの邊に至てホンヨと稱せる一大流、源ロシヤの城中に發すと合流して二十里を経てヒロケーに至り、海に入るチレンより此處に至るの間大小の合流又其數を。只其尤大なるもの而已をしるすなり。兩岸の廣狹に至ては、只偏岸一通の舟行、其詳をしるべからず、凡二二里の間を漫流するなるべし。ウルケーと稱する所、兩岸の相去事凡十八九町、是流末より徳楞に至るの間にして最狭き處となす。其淺深亦はからざる處なれば其詳をしらず。行舟中總て水底を見る處なし。其流水悉くカラフ

ト島奥地イクタマー、チャカガイの間に突當して、七分は北海に流れ、三分は南海に住ぐ。其水悉く濁水にして遅流なりといへども、たとふべきもなき大河なれば、風波あらくして、無政の夷壤なれば誰防堤を築く者もなく實に浩々洋々として其涯を望むべからず。其内島嶼洲渚の數々として星列する事、林藏が圖中に載するがごとく其島嶼總て柳樹を産する事夥く、競々として野草の繁生するがごとく、實に立錐の地なしといふべし。故に其河岸の廣狹猶更に詳にする事かたし。且かくのごとく大河なれば、時々洪水溢れ來て、河中の島嶼流没して其處を

付シ也江ノ浦
 語ヲ「アウラ
 ト紀シハ「ウ
 ラ」ノ聞誤也
 口口聲音ニテ
 角キコト見
 へ右ノ二語連
 譚シテ黒江ノ
 義ナリ龍ノ字
 ヲ加へシハ大
 河龍ノ鱗ル如
 キヲ以テ文飾
 ニ華人ノ加へ
 シナラン
 景保記

「ゴツカ」
 本「ゴツカ」
 「鯛」聞宮孝
 順本等「鮭」
 「其數をしら
 ず」の下聞宮
 孝順本等「大
 鮮を産す地夷
 此れを得て眞
 珠を探ると云
 ふ」

失ふ者あれば、沙石集り來て新に大洲を出す事ありて、
 河中の形狀四時に變革する事少からず。故に其叢生の柳
 樹大抵一島毎に其高卑を異にし、假令ば此島水没を免る
 事五年なれば、其柳も亦五年を経たる者のみ叢生し、
 三年を経たる者は三年の柳樹のみ生立て高卑ある事なし
 是其漫流變革の狀を概知すべし。河中産する所の魚物鯉
 に類する者、鯛に類する者、鮭のごとき者、以上三種無
 名にして本邦不見處の物也。鮭白鱗の者一種、本邦のご
 とくにして其肉濃紅なるもの一種、鱒細身の者、鮫本邦の
 不見處の物、鯨白色なる者、此他雜魚を産する者其數を

しらず、又他の産物ある事を見聞せず、只馬腦石を見る
 而已。〔以下他本を〕東韃地方より我カラフト島に來るもの、
 本朝の人古より概してサンタン人と呼び、其他方を指し
 てサンタン地と稱す、山丹山且山粗等の字を以て題名し
 來りしに、林藏地方を経歴してあまねく諸夷を見るに、
 其の習俗各異にして唯だ一種のものに非ず、スメレンク
 ルと稱する者あり、シヤンタと名付るものあり、コルテ
 ッケと呼ぶ者有り、其族各地境ありて其部を分てり。サ
 ンタンは即シヤンタの訛音にして、一部落なる時は地方
 の名となすべきものに非ず。サンタン夷は自稱してマン

七〇
コーと云ひ、韃地の諸夷これを指してシャンタと呼ぶ。
サントンはシャンタの音を訛轉して我カラフト島夷の唱
ふる所なり。

東韃紀行 卷之下終

スメレングル夷

一、シラヌシより西海岸凡百五十里なる處にキトウシ
と稱する地名あり。此處よりして奥地は滿州附屬の夷
スメレングルと稱せる異族の者住居す。其人物は理髮
耳飾ともにヲロツコ夷に異る事なしといへども、容貌
何となく少しく上品なり。其言語また悉く異にして辨
知し難きことの多し。其衣服亦獸魚皮を用ゆることの
少なからずといへども、滿州に至て交易する事屢なれ

ば本綿衣の類満州製の物を用ゆる事多し。

七二

一、女夷も又ヲロッコ夷に小異ある事なしといへども、其容貌嬾艶なる者多く、浴湯成粧の事は見聞する事なしといへ共、嗽口拭面する事は日毎に是をなす。故に顔色いつも瀟灑として醜穢の色なし。且其情蝦夷島女夷と大に異にして、相識さる人といへ共能馴昵し、言語通ぜざれば其云處瞭然ならずといへ共、時氣寒暖の應接などなし、いかにも婉情妖態多、男子に接するのさま親意殊に深しと云。

一、女夷裁縫の事に疏き者は、其顔色美艶也といへ共、



梳頭女夷



勸業女夷



衆夷是を賤して歸嫁に遠し。故に女夷裁縫の事を練熟する事殊に精勤なり。

一、此夷種よりして山且コルテツケ其他韃地の諸夷に至迄、女夷はいかなる過失ありといへ共殺する事なきを法とす。其女を貴ぶの情しるべし。

一、女夷梳頭の状、圖の如く口に水を含み居てしばく櫛目を濕し梳頭す。男夷は大抵みづからする者なく、女夷をして是を理せしめ、又相互にする者をも見るといふ。

一、女夷子を産すること見聞する處なし。只其子を育

するに至て、圖の如くなる械に縛し、屋より彫木を垂れて是を掛く、嬰兒より四五歳に至る皆如斯し。其下木器を置いて遺尿をうくる物とす。

一、手は束縛せられて動かす事あたわず。足は屈伸すべしといへども、又自由なる事なし。然れども其飄々たる事の快きにや、又地習のしからしむるにや、嬰兒は論なし、三四歳の兒といへ共涕泣する事なし。含乳せしむる時は、束縛のまゝ、是を抱て含しめ、飲み終る時は又懸る事本の如し。含乳の圖
初に出す

一、飲食また南方初嶋に異なる事なしといへ共、滿州より



粟豆麥蕎麥の粉を交易し來て是を食す。故に其割烹南方夷と異なる者あり。其概を下に出す。然れども其易^カる處多からざれば常食となすに足らず。時々稀に食するのみ。

一、一日中の食度、本より定たる事なく、其飢渴に隨て食する事なりといへ共、大抵兩三度を限とするなるべし。男夷は朝起のまま其所業に取懸り、漸に飢を催す頃^凡に及て^四家に歸る。其間女夷は家に在りて朝餉のもふけを調へ、夫の歸るを待て膳を進む。其勸食の狀大に本邦と異にして、飯菜交食する事なく、假令ば家

四時、今の午
前八時

内三人なれば、先釜中の魚を三つに分つ事、いかにも多少なき様に三盆に盛り、是を勧め、其食し終るを待て、又草根の煮物に魚獸の油をそぎたるを三椀に齊盛して是を勧め、是又食し終て後、他の粟むぎ粥などを勧む。如斯する事なれば、同物を二椀と食する事なし。且大抵の食物何物を食すといへども、饗應の席にあらざれば飮味弄食して多食する事なく、悉く儉にして其節をなせり。是其食物悉く山海に取て人造の物に非ず、多く得べき物なし。こは飢渴の事を恐るゝ心なりといひしと云。是奥地産物の其數不_レ多故也。

一、饗應の事は南方と異にして、其席貴賤の次序をなす事殊に嚴なり。家中正面に坐する者を上客となし、其左右順を以て列坐す。

一、酒は地製の物なく、悉く滿州より交易し來る處のものにして、其名をアルカと稱す。本邦の燒酎なり。ホーと稱る錫器に盛り、湯中に入、又は熱灰中に埋立て温酒となし、是を勧め。杯は陶器にして、滿州より易へ來る處の者。宴中一杯を巡環して是を飲み、他器を出す事なし。肴は其時により割烹種々の差有といへども、此下兩三種を出して其概をつらぬ。

滿州より交易して來る處、酒瓶、銅壺、杯、其

他盤となす所、本邦の漆器の圖
悉く卷末器械の部に寫出す。

割 烹

一、乾鱒

乾キトビル夷稱ワググ

右二味各細割して僅に鹽味を加へ、蕃椒粉を合して一

種とす。

一、生魚

鱒類

を水煮し、一器に盛り置、別にシヤシと稱

する海藻

昆布に似たり

キトヒル或は葱の類を合割し是を水に

放つ時は、其水ねばりて少しく鹽氣を存す。是を以て

水煮の魚肉を食ふ。

一、大豆

キトビル

眉兒豆イシケン

其他草根木實を合して能

々水煮し、魚油を沃いて和物とす。

一、蕎麥の粉を以て餅を製し、魚油を注で一種とす。

一、粟を粥となして一種の肴にあつ。滿州より遠來の物
なれば、珍味として賞翫すといふ。

其大概凡如^レ斯類にして、他獸魚の肉は有に任せて割烹
す。

一、凡諸肴何によらず一種毎に一盆に盛る事なり。譬へ
ば肴五種有時は五盆を出す。平生の食事と異にして客
毎に盆を設けず。其坐の次序を追ふて一盆づゝ廻食し、
其態主人強勸すれば客固辭する杯の事も有りて、蝦夷

島宴飲の類に非ず。

一、此夷域に至りては酒も殊に少く、貧賤夷の如きは其味を知らざる者少からず。然るに林藏齋らし行處の砂糖を出して是を嘗しむるに、只奇なりと稱する迄にして其餘りを乞ふ者更になし。酒、多葉粉ダバコに至ては少敷出して是を嘗しむるに、忽其味を悦び、餘りを乞ふに殊に切にして、甚敷者に至ては顔色相貌平生に異なるに至る者あり。此夷飲食中の嗜好是を外にして他物ある事なし。

一、此夷種も又其地の寒暖によりて穴居する者あり、せざる者あり、其穴居せざる者の居家は大抵五六間四面乃至八間四面許或は縦長く横短き者ありに方木を以て組み製し、家の四方戸口有て明りをとり、又出入す。屋根は木皮を以て是を覆ひ、其上に覆ふに雜草を以てす。風の吹散らん事を恐れて、縦横に木を伏せ置事、如圖。

一、家の裏牀ウツチを四方に設て其表面石を疊て是を築き、其内を空虚にし、其兩端戸口の處に至る側と上面を穿て竈となす。故に其炊烟竈の外に出ずして悉く牀中を廻て家の四隅に達して後家外オホロに逮て筒木中より發し去りぬ。是を以て嚴冬積雪の時といへども家内温暖にして

穴居せずといへども可なり。

一、家の中央は初島穴居中の如く土間にして、其中央に閣タナを設け、飲食の雑具其他日用の器械は總て此閣上に貯ふ。

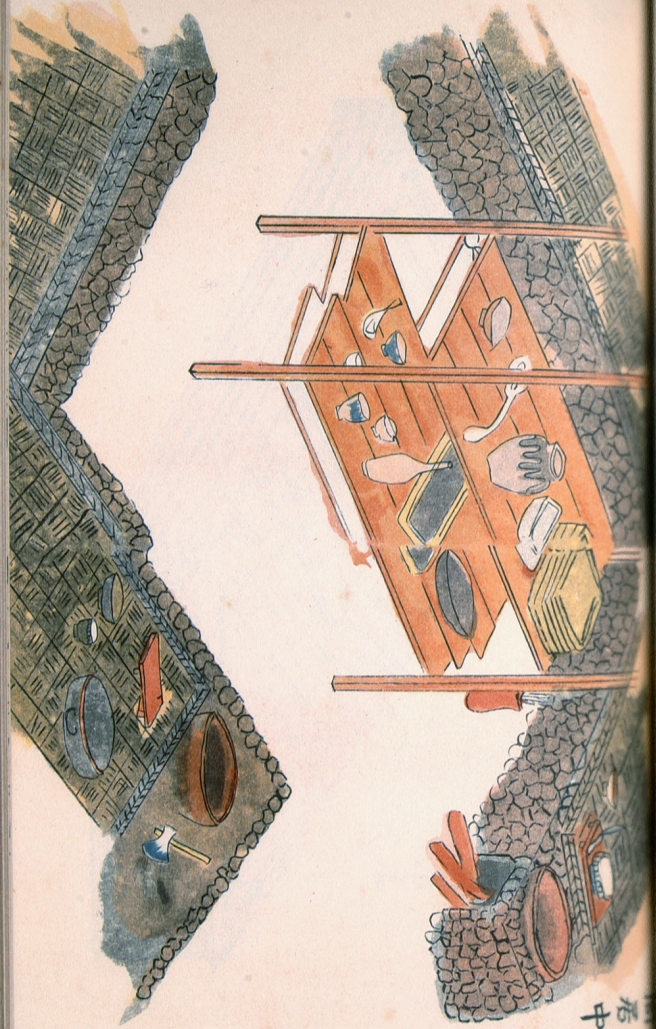
一、戸扉は悉く割板を以て是を製し、障子は本邦の如く格子を製し、魚皮を以て是を張る。

一、冬月に至る時は四壁の表面土を粘して細隙の風を防ぐといふ。

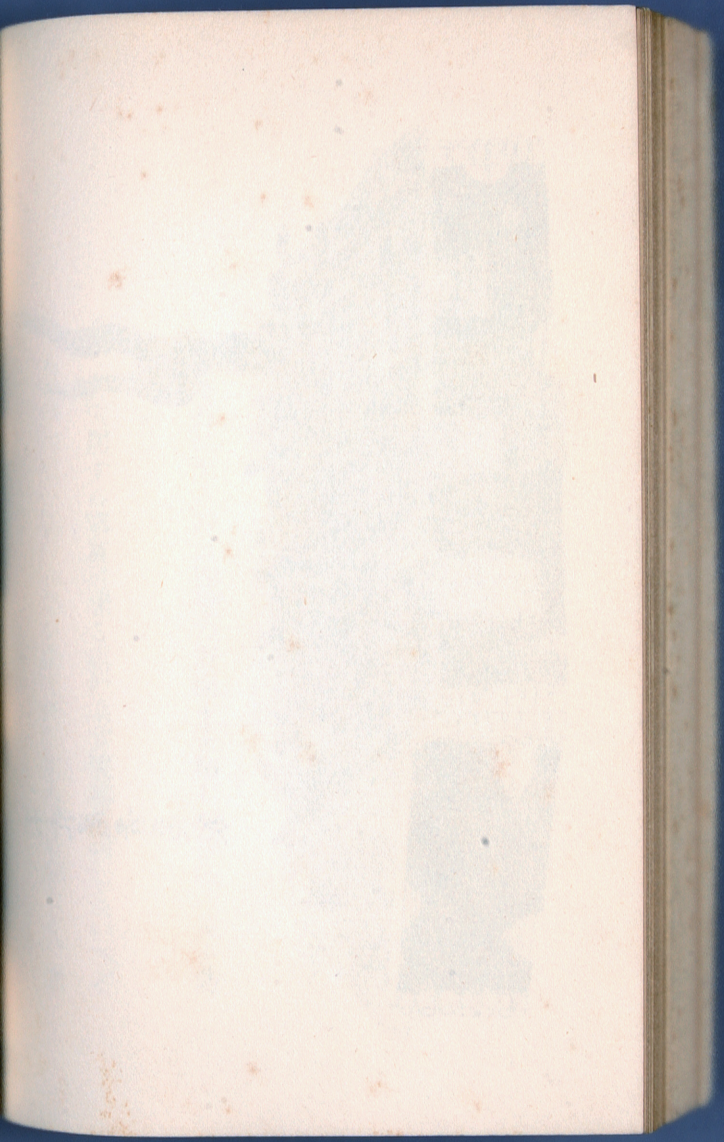
一、其穴居する者夏月居る處の家其製總て同じといへども、戸口は一處のみ是を設て外に出入する處なく、窓

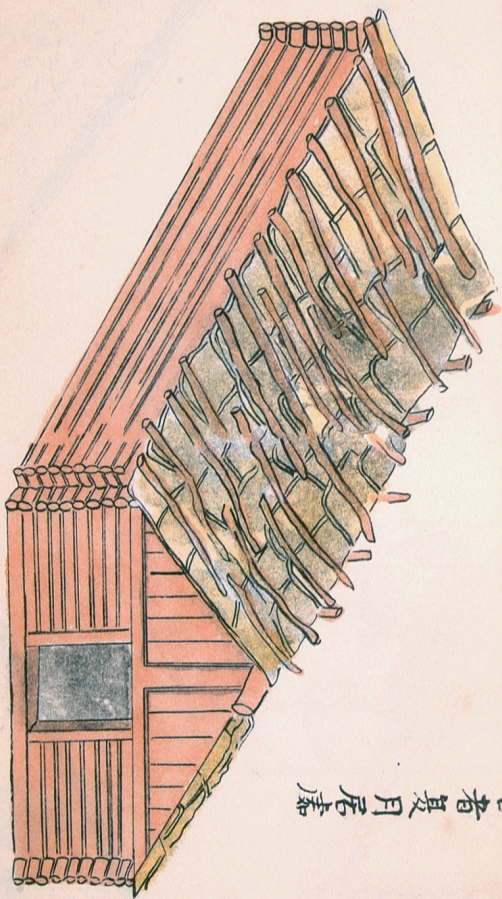
不穴居者夷家



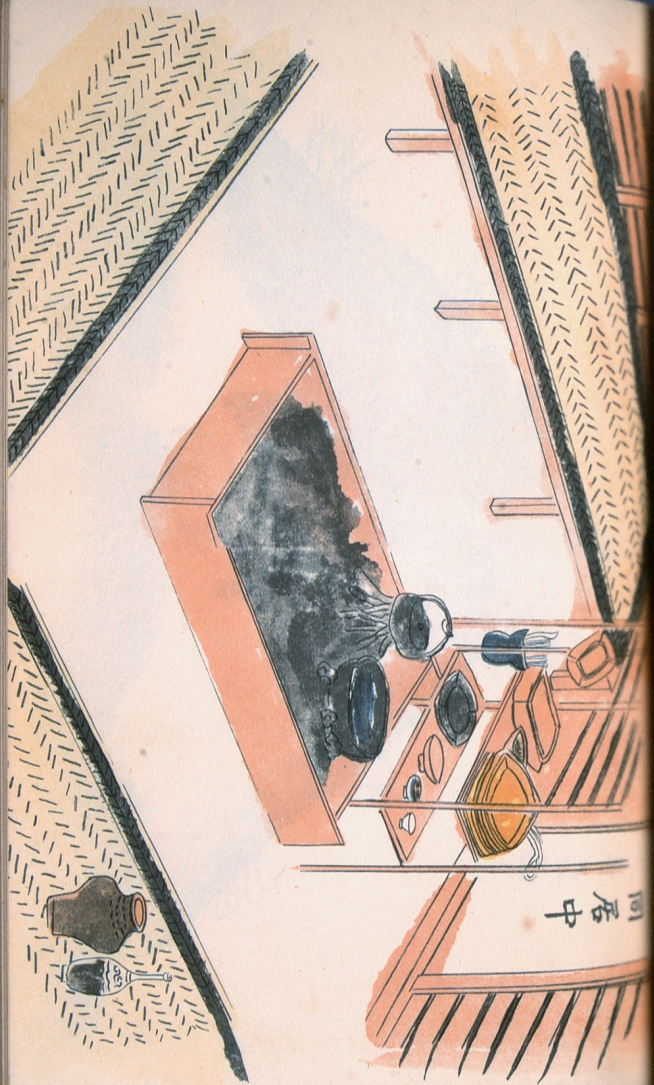


中居





此塔者夏月居席



中居

无居表面



を屋上に開いて透明の處となし、牀は三方に設くといへども石を以てせずして板を用ゆ。家の中央大なる爐を製して外に竈を設けず、其側閣を置いて雜器を委す。

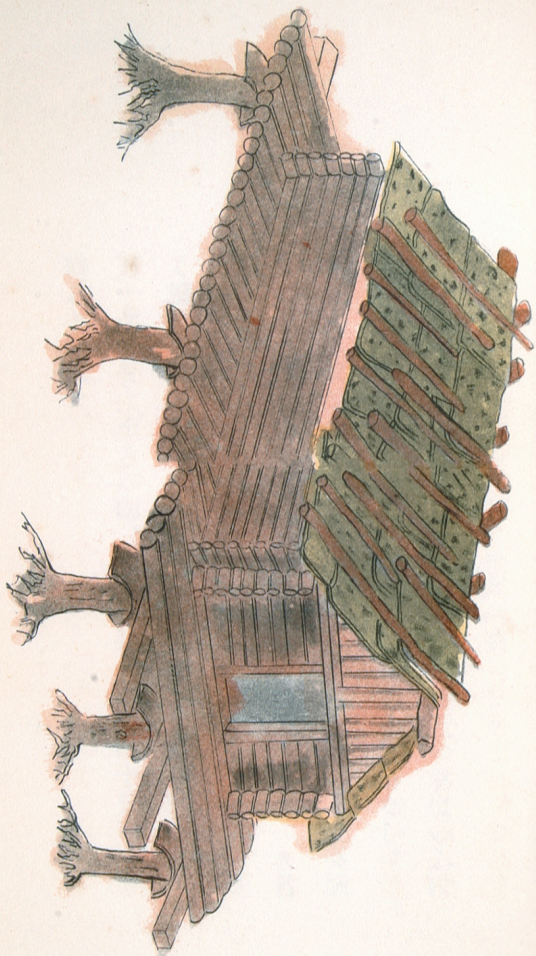
一、其穴居の狀林藏其表面のみを見て其居中をしらず、故に其見狀のみを圖して其不見處を闕如す。蓋初島の穴居に異る事なし。

一、倉廩の製又居家と同し。山に行て木を掘りて根の殊に蔓延し地上に置て轉倒せざる物を撰み、持來て礎となす事圖の如し。

一、産業又漁獵を務め交易を事とす。且又犬を使ふ事南

方の如くにして尤甚しとす。オロツコ夷、に異なり貧富の者に論なく家々是を飼さるものなし。其惠養の厚き事又南方に倍せり。一家の内男女の論なし、各犬を養ひ、是は家翁の犬、彼は老嫗の狗、嫡子のイヌ癸、二男のイヌ尨など稱して各三頭五頭を養ふ。故に一家の養ふ處といへども其數許多なり。其用る處は初島の處用に異なる事なし。

一、此夷種も又交易を事とする事南方夷の如くにて尤甚しとす。實に男女の差別なく悉く交易を勤む。凡一里半里の處に諸用有て出行といへども、必交易の諸品を携行き相互に交易をなして歸り來ると云。假令同集中



の夷相集て談話する事暫時の間なりといへども忽に交
易をはかるに至る。實に生産の第一なり。

一、此夷種諸物の貸借をなす事、朋友昵近の者はいふに
及ばず、遠境隔土の者といへども忌憚する事なし。

一、此夷も又鍛治をなす事南方夷に異なる事なし。此夷域
に至ては鐵物ますく無數アズダなければ地鐵となすべき者
少し。故に破鍋など貯置て地鐵となす。其鐵元よりづ
く鐵なれば練磨の事大に辛苦なり。且其鐵練磨し終て
刀とすべきに至るの間、漸々滅却して僅に十分の一を
得るといふ。

一、漁獵の事總て南方に異る事なし。只差網を設て魚を得るに圖の如くなすものあり。潮水増減の時に當りて灣口杯の迫處に施し魚を得る事許多なり。

一、ノト邊の海岸地圖中に載する如く沼湖多し。其邊り鳴如き小鳥群集する事雲霞にひとし。兒夷戲遊の暇是を得る事圖の如く、兩兒相對して繩を引、一兒をして鳥を追しむ、鳥驚翔りて繩上を越るの時、兩兒繩を踴らして是をうつに、大抵一打にして三四羽より七八羽を得に至る。繩長凡十二三尋、長夷も又是をなすといへども、大抵兒のなす處なり。

「十三尋」
安政刊本「三
四尋」

澳



兒童戲水



一、漁獵の事總て南方夷に異る事なしといへども、其性素より剛強なる者なれば、其業をなす事實に晝夜の分ちなく、孜孜として飢渴を忍び、艱苦を堪へて強勉する事、其地産物多からず、惰逸する時は飢餓に迫る事有を以て勢の必至る處といへども、南方夷の及ざる處ありといふ。